

巻頭言

都市において農業を行う意義はどこにあるのか？

菊地 俊夫（首都大学東京都市環境科学研究科教授）

都市農業とは何かという議論がよく行われ、さまざまな定義がなされてきた。一般的には、都市農業は「市街化区域で行われる農業」として簡単に定義されるが、実態としては、住宅地や商業施設、あるいは工業用地などの都市的土地利用との競合にさらされ、それらとの地代格差によって縮小を余儀なくされている。また1980年代前半までは、都市農業やその基盤となる都市農地は都市化や住宅地開発の障害として肩身の狭い思いをしながら存在していた。さらに、都市農業は多品目少量生産で行われるため、そこでの農産物は均一で廉価なものが大量に取引される都市市場に出荷もできなかった。そのため、地域における都市農業の存在意義は次第に薄れ、農家の都市農地を維持する意欲も農業地代の低下とともに削がれていった。かくして、都市域における多くの農家は農業を中止し、都市農地は都市的土地利用に転換された。

しかし、都市農業や都市農地の見方や考え方が、1990年代になると少しずつ変化するようになった。それは、都市農地にさまざまな機能が見出され、多くの機能が有意なものとして認められるようになったためである。それらの機能に関して、1つには緑地機能があげられる。都市における緑地の存在は景観を向上させるだけでなく、居住環境のアメニティを向上させ、都市のヒートアイランドを抑制する。2つ目は自然の水循環の機能である。つまり、農地に降った雨水は地下に浸透し、地下水や河川をゆっくりと涵養する。それとは対照的に、アス

ファルトやコンクリートの都市的土地利用の地面では、雨水が地下に浸透することなく、表流水となり河川に流入する。このような水循環に支えられた都市農地は生物多様性の宝庫となり、都市における貴重な生態系や自然環境を形成することになる。

3つ目は余暇やレクリエーションの機能である。都市住民は、土いじりや作物栽培など農地と親しむことにより心身をリフレッシュすることができ、そのことは都市における市民農園や農業体験農園の発達の契機にもなる。農家にとっても都市農地が余暇やレクリエーションで活用されることは新たな収入源にもなる。4つ目は防災や災害の避難場所としての機能であり、それは都市農地の新たな役割として阪神淡路大震災以降に注目されるようになった。そして、農作物の生産機能も本質的なものとして重要である。実際、多品目少量生産による農産物は直売所で販売され、新鮮で安く生産者の顔の見える安全安心なものとして都市住民に提供されている。

以上に述べてきたように、都市農業や都市農地は単に食料を生産する空間だけではなく、さまざまな機能をもつ空間として存在している。それらの機能の根底には農家と都市住民を結びつけるつなぎ手としての役割がある。したがって、都市において農業を行う意義は、農業や農地のもつさまざまな機能にあるが、それ以上に都市住民と農家（地元住民）のつなぎ手としての役割にあるといえる。